

「ステファノの殉教」

2016年04月07日

使徒言行録 7章 54節～8章 1節 b。人々はこれを聞いて激しく怒り、ステファノに向かって歯ぎしりした。ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」と言った。人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた。人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。サウロは、ステファノの殺害に賛成していた。

ステファノは神を冒瀆した罪状で最高法院に訴えられ尋問を受けた。ステファノは「その顔はさながら天使の顔のように見えた」と書かれるほど、無私、無欲、澄み切った弁明をした。結論は二つである。イスラエル人が崇めるエルサレム神殿には、天地を創造された神は住まわれない。先祖が預言者たちを迫害し、殺したように、あなた方も預言者たちが預言した、神が遣わした正しい方（主イエス）を裏切り、殺した。これを聞いた人々は激怒し、歯ぎしりした。ステファノは聖霊に満たされ、天を見上げ、神の栄光と神の右におられる主イエスを見て「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」と言った。人々は大声で叫びながら、聞くに堪えぬと耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかった。そして、都の外に引きずり出して石を投げ始めた。神を冒瀆した者に対する石打の刑を執行したのである。

ステファノは神の真理を語った。人々は神の真理を自らの中に持っていると思っていた。自らの中に真理を持っていると思う者は自分を正しいとし、反対する者を許さない。人は真理を手中に収めることはできない。あくまで、指差し、従うのである。真理を証しするステファノと真理を手中にしていると豪語する人々との決定的な違いがある。

人々は着物を脱ぎ、サウロという若者の足もとに置いて、石を投げた。サウロがこの石打刑の責任を負う立場にあったと思われる。彼は後の宣教者パウロである。息が切れるまで、石を投げつけられる刑は残虐であるが、この間、ステファノは主に呼びかけ「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と祈った。それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んで、眠りについた。

ルカ福音書の著者は、主イエスは十字架の上で「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と祈ったと書いている。ステファノは主イエスの祈りに倣い、自分を殺す者を赦してくださいと執り成しの祈りを捧げている。ルカ福音書、使徒言行録の著者は十字架の赦しを福音の核心と捉えている。

サウロ（パウロ）はその後もクリスチャン迫害に息を弾ませるが、この時のステファノの「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」という祈りが、心の奥にぐさりと突き刺さっていた。ステファノの祈りがパウロの回心に大きな影響を与えたに違いない。パウロの宣教内容はステファノの信仰を深く継承している。ステファノはキリスト教界における最初の殉教者になった。真理を証しする者は、時代から迫害されることを示す出来事であった。